

2 盗掘によって暴かれた中心埋葬施設



古墳の頂上には、造出しの粘土槨よりも高位の人物が埋葬されたと考えられる大きな粘土槨があります。明治時代に盗掘されてしまいましたが、鍬形石や石製模造品、有鈎銅釧などの出土品は重要文化財に指定され、京都国立博物館に所蔵されています。このほか、富雄丸山古墳出土とされる三角縁神獸鏡3面を天理参考館が所蔵しています。

2018年度から奈良市教育委員会が再発掘調査をしたところ、埋め戻した土の中から斜縁神獸鏡(右)や鍬形石の破片、管玉(左)などが出土しました。



3 水の祭祀を表現する湧水施設形埴輪

古墳の南東側には小さな張り出しが取り付いており、その上には建物を模した形埴輪が置かれていました。囲いのなかに小さな方形の建屋があり、その内部には2つに仕切られた槽があります。神聖な湧き出る水を使った祭祀を執り行う建物とされ、湧水施設形埴輪と呼ばれます。造出しとは別に祭祀のための空間が設けられていたと考えられます。

4 約200年後に造られた前方後円墳と横穴式石室

富雄丸山古墳の正面には、小さな2号墳と3号墳があります。2つの別々の古墳と考えられていましたが、発掘調査によって1つの前方後円墳となる可能性が示唆されました。後円部に相当する2

号墳には横穴式石室があり、6世紀中ごろに造られた須恵器が副葬されていました。古墳が造られてから200年後にも、富雄丸山古墳の被葬者を先祖と慕う人々がいたことがうかがえます。



編集 奈良市教育委員会教育部文化財課 埋蔵文化財調査センター
〒630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL 0742-33-1821
発行 奈良市教育委員会
発行日 2024年11月30日 [第1版]



奈良市埋蔵文化財調査センター
公式X



奈良市動画チャンネル
(公式YouTube)



「謎の4世紀」を現代に伝える歴史遺産

富雄丸山古墳

第1版

Old History,
New Discovery.
NARA CITY

奈良市西部を南へ流れる富雄川を望むとみおまるやまこふん富雄丸山古墳は、4世紀後半に造られた直径109mの円墳で、円墳の中では日本最大規模となります。

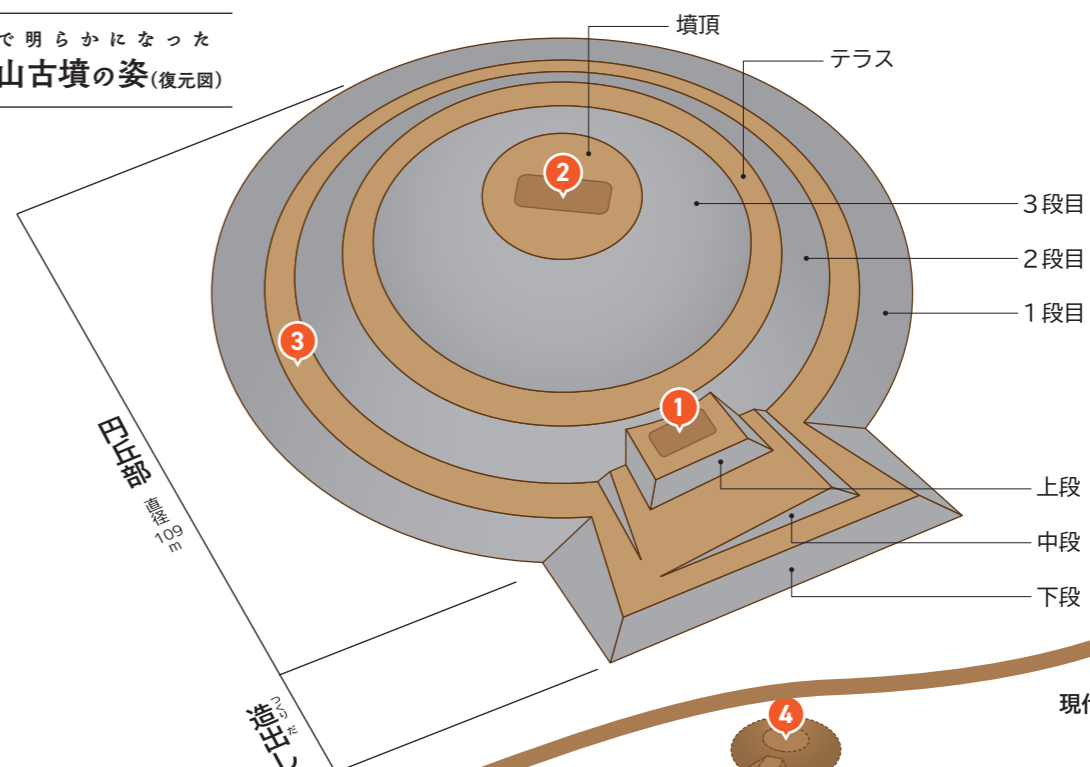
奈良市教育委員会では2018年度から6年間に渡り、富雄丸山古墳の発掘調査を実施しました。調査によって墳丘の構造や埴輪の種類などが詳しくわかったほか、円丘部の北東に造出しと呼ばれる長方形の張り出しがあり、その上から未盗

掘の埋葬施設が発見されました。2022～2023年度にその調査を行ったところ、中に納められた木棺や類例のない特異な副葬品が極めて良い保存状態で残っていました。

4世紀の倭国の歴史を記した史料は少なく、不明な点が多いことから「謎の4世紀」と呼ばれます。富雄丸山古墳での一連の発見は「謎の4世紀」の実像を解明するための糸口になると期待されています。



発掘調査で明らかになった
富雄丸山古墳の姿(復元図)



富雄丸山2・3号墳(墳丘の形は推定)

1 奇跡的な保存状態で現代に蘇った 粘土槨とその副葬品

造出しの上には、木棺を粘土で覆った粘土槨という種類の埋葬施設があり、粘土の中には蛇行剣と鼈龍文盾形銅鏡が埋め込まれていました。

通常、木棺は土の中で腐ってしまい残らないことが一般的ですが、富雄丸山古墳では粘土槨の中から奇跡的な保存状態で出土しました。コウヤマキの幹を半裁して内部をくり抜いた割竹形木棺という種類で、長さは5.86m(うち残っていた部分は5.54m)に及び巨大な棺です。身と蓋の端部に付く縄掛突起に加え、棺内空間を区切るための小口板・仕切板が棺内に立てられた姿のまま出土し、木棺の構造がよく分かる貴重な例です。

棺内は2枚の仕切板によって3分割されています。中央の主室は遺体を入れる空間で、骨や歯は残っていませんでしたが、被葬者の頭部付近には水銀朱が撒かれていたほか、足元には竖櫛が置いてありました。竖櫛は漆を塗った竹製で、髪を飾る以外にお守りとしての機能があると考えられます。足側の副室には3枚の銅鏡がいずれも鏡面を上に向けて重ねて置かれていました。

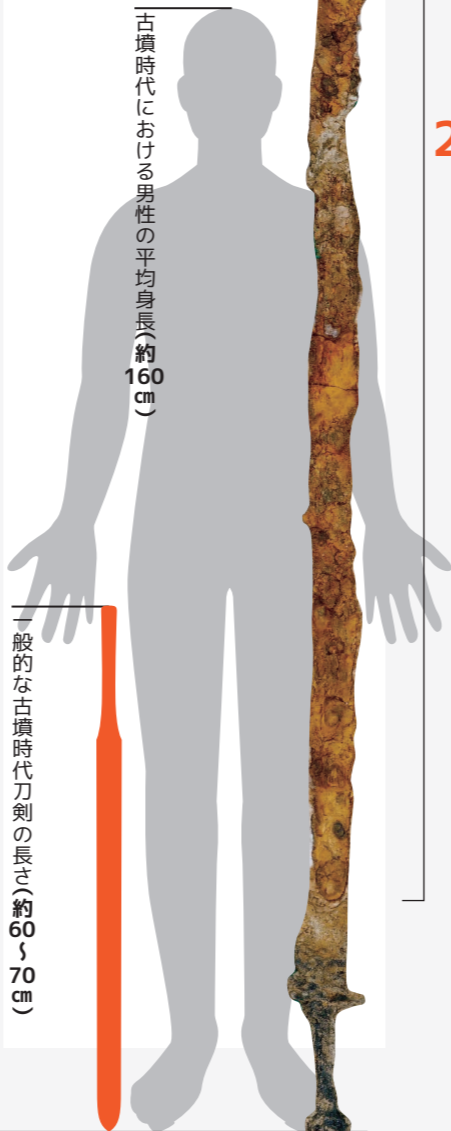
土中の高い水分量や、青銅製の副葬品から染みだした金属イオンの効果で雑菌の繁殖が抑えられた結果、通常であれば朽ち果ててしまう木棺や有機質遺物がきれいに残っており、古墳時代の葬送儀礼のすがたをよく留めていました。

実用性度外視、 儀礼のための武器 蛇行剣

装具を含めた蛇行剣の長さ
285 cm

285 cm

古墳時代における男性の平均身長(約160cm)



蛇行剣本体の長さ
237 cm

237 cm

呪術的な文様、 類例の無い特異な鏡 鼈龍文盾形銅鏡

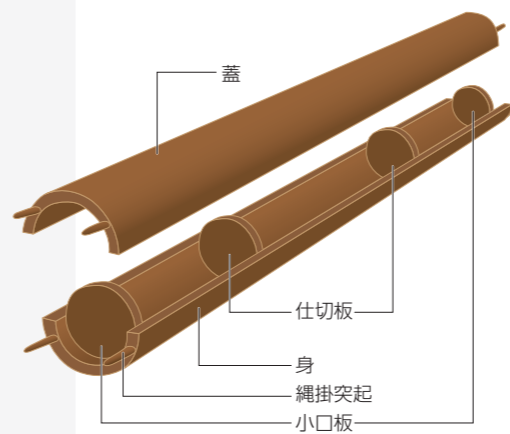
鼈龍文盾形銅鏡は高さ64cm、幅31cmの銅鏡で、古墳時代に多く用いられた革製の盾を模した形状です。日本国内では弥生・古墳時代の鏡が6000面以上出土していますが、そのほぼすべてが円形で、盾の形をした鏡は類例がありません。さらに、円形の鏡で日本最大だった平原1号墓(福岡県糸島市)出土の内行花文鏡(直径46.5cm)を面積では上回るほどの巨大な鏡です。

鏡背面の中央には半球状の鈕(ひもを付けるつまみ)がついており、その上下には中国の神仙思想における神と獣の表現が形骸化した、倭国固有の鼈龍文と呼ばれる文様が描かれています。文様の隙間には、邪気を払う呪術的な文様とされる三角形の鋸歯文が描かれており、盾としての機能を一層際立たせています。4世紀の倭国が高い金属工芸技術をもっていたことを伝える逸品です。



未盗掘、 当時の姿を伝える 奇跡の木棺

割竹形木棺と棺内副葬品



左 粘土槨の中から姿を現した割竹形木棺。かまぼこ形の蓋は中央が土の重みで割れていますが、長さが16cmほどの縄掛突起(手前右側/上画像)が残っていました。

右 蛇行剣は刃部が左右に蛇行する特殊な剣で、全長237cm、装具を含めると285cmに及びます。今までに発見された蛇行剣の中では最古であるうえ、剣としては古代東アジア世界で最長となります。剣を握る部分に付けられた把装具には、剣に通有の把縁突起だけでなく、これまで刀に特有の装具であると考えられていた楔形把頭も付いており、剣と刀の両方の特徴を備えています。

1 上から見た割竹形木棺内部 2 棺内に副葬された竖櫛 3 棺内に副葬された銅鏡3面